

タラントンのたとえ

マタイ福音書 25:14-30

(そのとき、イエスは弟子たちにこのたとえを語られた) 「天の国はまた次のようにたとえられる。ある人が旅行に出かけるとき、僕たちを呼んで、自分の財産を預けた。それぞれの力に応じて、一人には五タラントン、一人には二タラントン、もう一人には一タラントンを預けて旅に出かけた。

早速、五タラントン預かった者は出て行き、それで商売をして、ほかに五タラントンをもうけた。同じように、二タラントン預かった者も、ほかに二タラントンをもうけた。しかし、一タラントン預かった者は、出て行って穴を掘り、主人の金を隠しておいた。

さて、かなり日がたってから、僕たちの主人が帰って来て、彼らと清算を始めた。まず、五タラントン預かった者が進み出て、ほかの五タラントンを差し出して言った。『御主人様、五タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに五タラントンもうけました。』主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』

次に、二タラントン預かった者も進み出て言った。『御主人様、二タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに二タラントンもうけました。』主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでく

れ。』ところで、一タラントン預かった者も進み出て言った。『御主人様、あなたは時かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だと知っていたので、恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントンを地の中に隠しておきました。御覧ください。これがあなたのお金です。』主人は答えた。『怠け者の悪い僕だ。わたしが時かない所から刈り取

り、散らさない所からかき集めることを知っていたのか。それなら、わたしの金を銀行に入れておくべきであった。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きで返してもらえたのに。さあ、そのタラントンをこの男から取り上げて、十タラントン持っている者に与えよ。だれでも持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。この役に立たない僕を外の暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。』」

先週は祝日だったので通常の暦とはちがう箇所（ヨハネ2:13-22）を読みました。きょうは年間の暦に戻ってマタイの25章となります。この25章はおっかない話、終末のさばきに関する譬えや戒めが記されている箇所で、「十人のおとめのたとえ」「タラントンのたとえ」「すべての民族を裁く」と新共同訳聖書では3つの見出しで要約・区分しています。きょうのテキストはそのうちの真ん中、二番目にあたる「タラントンのたとえ」です。(暦どおりでいけば先週は「十人のおとめのたとえ」のはずでした)

この譬えには平行箇所がルカ福音書19章12-27にあり大意としては同じことが記録されています。でもルカの方が解りやすい気がします。というのは、ルカ福音書では公平に与えられるお金がマタイ福音書では不公平に与えられているからです。

ルカ19:13

そこで彼は、十人の僕を呼んで十ムナの金を渡し、『わたしが帰って来るまで、これで商売をなさい』と言った。

マタイ25:15

それぞれの力に応じて、一人には五タラントン、一人には二タラントン、もう一人には一タラントンを預けて旅に出かけた。

マタイ福音書のお金の配分は普通感覚で行けば、まったく嫌味な神さまだ

と感じてしまう、でも、これって現実でしょう。

ある人は金持ちの家に生まれてなに不自由なく暮らす、一方で貧乏でしょっちゅう金に困っている人もいる。生まれたときから片目がない人もいれば、生まれながらの脳性まひで両手両足が自由にならない人もいる。五体満足な人もいれば、五体不満足な人もいるのです。

ルカ福音書では公平に与えられたお金（神さまからの賜物か？）で頑張った人と怠けた人で差がついて神さまに裁かれるという話、でもこれは常識です。こういっちゃ身も蓋もないのですが、なにも神さまをもちだすまでもない話じゃなしょう。

マタイ福音書ではそうではなく、最初っから不公平で、おまけに一番恵まれていない一タラントンの人が叱られて地獄に落とされる、なんともやりきれない話になっています。

このテキストにはいろいろな解釈があってそれぞれ教えというか説教が語られるのですが、わたしはその中から二つの問いに対するそれぞれの解釈を紹介してきょうのテキストの読み解く糸口、ヒントしようと思います。

一つ目

神さまは最終的にお金を儲けることを望んでいるのか？

テキストの表面を読んでいけば、神さまは金儲けがうまい人を褒めているので金儲けを望んでいるとなります。でも二タラントンの人も褒めているので、結果として金を儲けたというよりも、与えられたものをどう用いたかを評価の対象にしているとも思えます。また、この譬えにはでてきませんが、預かった元手で商売したけれどしくじってしまいすってんてんになる、一タラントンの人も残っていない場合もあるわけです。

ここでこのタラントンの譬えをイエスにあてはめて想像してみます。イエスは神から与えられたタラントンをどのように使ったのかという仮定の問いで

す。

この仮定の問いからすると、たとえ損をしても主人は褒めてくれる、と考える可能性はあります。なぜなら、イエス自身の生き方、その受難と死は、ある意味で、神から与えられたものを全部使い果たしてしまうような生き方（すってんてんになった）だったからです。

二つ目

ユダヤ人はだれに喩えられているのか？

ところで、一タラントン預かった者も進み出て言った。『御主人様、あなたは時かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だと知っていましたので、恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントンを地の中に隠しておきました。御覧ください。これがあなたのお金です。』 25:24-25

「ご主人様は厳しい方」この神（ご主人様）を恐れる態度はまさしく生粋のユダヤ人です。お金の件でいうと当時の常識としてはお金は埋めて隠す方法が一番安心安全だったという人もいます。動乱の続く世の中で銀行にあずけても戦争があつたりして危なかった、銀行なんて当てにできなかった、という推測です。

仮にお金を信仰心のたとえだとすると、ひっそり大事にだれにもバレないように信仰するか、あけっぴろげに誰彼にも信仰をすすめて回心させる、今風にいえば、五タラントンの元手で派手に広告をうってイベントを開いてどんどん人をかき集めて神を語り救いへと導くということになるのでしょうか。

マタイたちユダヤ人キリスト者からすれば、イエスは救い主（メシア）です。イザヤをはじめ偉大な預言者たちによって語られていた、神が約束していたメシアです。そのメシアが現れたというのにそれを告げ知らせず（福音を語らず）土の中に埋めるとはなんたることか、そんな場合じゃないだろうという非キリスト者ユダヤ人に対する批判になります。

この二つの読み方、解釈を折衷してテキストから教訓を導き出すとこんがらがってしまうでしょう。これらは反対のことというか互いに相反する意味を持っているように思えるからです。福音はシンプルに語られるだけでなく、なんかこんがらがっているように見えていて、実はシンプルにも読めるという福音もあるのかもしれませんが。

わたしは25章のマタイ福音書からただに終末に関する教え、裁きの恐ろしさを読むだけでない、ほかに別な読み方もあるとおもっています。どうぞ銘々それぞれ自分なりにこの福音を受け取ってください。
